

やまと 民俗への招待

鹿谷 勃

秋の彼岸の前後、新聞で彼岸花が咲く光景を何度も見た。埼玉県日高市には巾着田曼珠沙華公園があり、500万本の花が咲くというが、感染拡大防止で花は刈り取られ、昨年に続いて祭りは中止だった。奈良県内では、明日香村稻瀬、御所市の九品寺や一言主神社付近などが群生地で知られている。「彼岸花の名所全国最新情報」というサイトもネットにあり、桜の開花のように、彼岸花が鑑賞対象になってきていることがわかる。

彼岸花は曼珠沙華ともいふが、これは赤い花を表す梵語から由来するといい、他にも多くの地方名、民俗呼称を持つことがある。柳田国男は「草の名と子供」（1939年～昭和14年）で、この植物にも関心を寄せ、全国の呼称を集めている。柳田の生まれ育った播州では

「狐の剃刀」と呼んでいたが、奈良県の北部でもこの名があり、摂津の多田では、カミソリグサといふ。昔の子供は「さかやき」を剃られて痛い思いをしていたので、剃刀に関心があったのだろうという。紀州熊野では狐草・狐花、石見でエンコウバナ、ヤクビョウバナ、ドクバナ、群馬などでは葬式をさすジャランボングサ。日向の都城ではデゴクバナ、埼玉県東部では、幽霊花、シンダモンバナ、播州の西では、ずばりシビト花という。奈良県の竹之内ではテクサリやシタコジキといふ。県内では私も、テクサリバナやキツネノカミソリという呼称をよく聞き、火事を連想させるので、家内に持ち込んではいけ

A black and white photograph of a field of spider lilies (Lycoris radiata). In the foreground, a single flower head is prominent, showing its characteristic arrangement of long, thin, drooping petals. The field extends into the middle ground, filled with more of these flowers. In the background, there are dark silhouettes of trees and hills under a sky filled with scattered clouds.

は言い、「此花を見た目に美しいことは忘れないことが出来ない」のでイカリ花（豊後）、チンチンドウロ（石見）、オミコシ（河内）などの名も付け加えている。

彼岸花はヒガンバナ科の多年草で、人里近く、畦や堤、墓域などに群がり咲く。30^{サギ}ほどの花茎の先に、秋の彼岸ごろに真紅の長い花を輪状に付ける。花が枯れると、そのあとに、細長い葉が多数群がり生えて、翌年初夏には枯れるという珍しい性質がある。

花が、夏の強い日差しの下ではなく、涼やかで静寂な秋の気配漂う田んぼや墓地に群生する。その不思議な生態や強烈な色彩に、人々は言い知れぬ妖しさと関心を抱き続けってきたのだろう。高浜虚子の「曼珠沙華あれば必ず鞭うたれ」は、そうした心情を反映した句だろう。しかしその球根は、でんぶんを含んで救荒食物にもなり、オエモチ・オイモチと呼ばれて利用もされたが、十分に晒さないと毒性は残り、人を死に至らしめる。先の大戦では、彼岸花の球根をパラシュー^トの糊付け用に供出したと、あちこちで聞いた。その鮮やかな印象が最近は喜ばれ、庭に植えたりもするというが、市街地の道端でこの

彼岸花への意識と民俗

表

表) (奈良民俗文化研究所代
べくものが私にはある